

【基盤研究(S)】 大区分A



研究課題名 非流暢な発話パターンに関する学際的・実証的研究

京都大学・大学院文学研究科・教授
さだのぶ としゆき
定延 利之

研究課題番号： 20H05630 研究者番号：50235305
キーワード： 非流暢性、言語学、会話分析、日本語教育、言語障害

【研究の背景・目的】

伝統的な言語学は「流暢さ」を、ニュース原稿を読み上げるアナウンサーのようにミスの無いスムーズさと定義した上で、「母語話者は流暢に話す」と仮定してきました。つまり母語話者の発話が非流暢になる場合を例外としてきました。その中で私は、日本語を中心とした発話の非流暢性に1990年代初頭から取り組んできました。研究していてつくづく感じたのは、母語話者の非流暢な発話は現実のコミュニケーションの中ではしばしば非流暢と扱われず、見過ごされ、容認されやすいということです。たとえば誘いを断る場面で「あー」と言いよどむことは、好まれさえします。では、母語話者の非流暢性は「非流暢性の本質」からどの点において、どのように離れているのでしょうか？ この研究では、母語話者の非流暢性を、より非流暢らしいと思われる他の2種類の非流暢性(学習者の非流暢性・言語障害者の非流暢性)と対照することにより、「非流暢性の本質とは何か？」という問いに、現代日本語を中心に取り組みます。

【研究の方法】

上の問題意識は、言語学・会話分析・第二言語教育・言語障害研究という4つの研究分野にまたがっています。それらの分野ごとに作業の方法を紹介します。

作業1(言語学)：日本語母語話者の非流暢な発話の規則性を言語学的に観察し、そこに規則性を見出して抽出・記述します。観察は、質的な観点・量的な観点の双方からおこないます。

作業2(会話分析)：母語話者の非流暢な発話パターンがコミュニケーションの中で、いつ、どのように容認されるのか(あるいはされないのか)を会話分析的な手法で明らかにします。

作業3(第二言語教育)：日本語学習者の非流暢性を母語話者の非流暢性と比較対照して特徴を抽出し、学習者の非流暢性がコミュニケーションの中で問題となりやすい要因を特定します。

作業4(言語障害研究)：日本語母語話者・学習者の発話の非流暢性を、言語障害者の発話の非流暢性(吃音、失語症、運動性構音障害、聴覚障害による不明瞭な発音等)と生理学的に観察・比較することによって、それぞれの非流暢性の特徴を明らかにします。

4つの作業の関係は、図1のようになります。

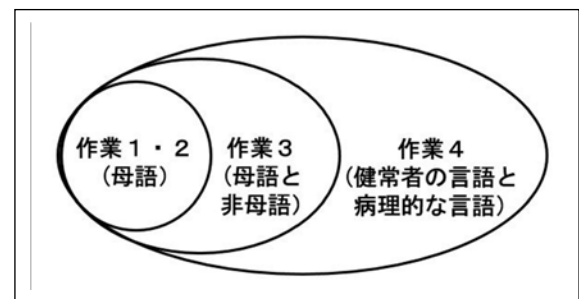


図1 4つの作業の関係

観察結果を検証・精錬するために、母語話者のように非流暢に話す音声合成システムを開発することも予定しています。さらに、代表的な非流暢性発話の電子資料館もネット上に開設予定です。

【期待される成果と意義】

発話の非流暢性は、現実のコミュニケーションに遍在する現象であるだけに、その本質の解明は、コミュニケーション研究を大きく進展させる起爆剤になり得ます。本研究は、4つの分野の研究者が1つの問題意識のもとに共働することによって、発話の非流暢性の本質を解明し、新しいコミュニケーション研究の基礎を築こうとするものです。

【当該研究課題と関連の深い論文・著書】

- 定延利之『コミュニケーションへの言語的接近』東京：ひつじ書房，全356頁，2016.
- 定延利之『文節の文法』東京：大修館書店，全158頁，2018.

【研究期間と研究経費】

令和2年度－6年度 112,500千円

【ホームページ】

http://www.speech-data.jp/kaken_hiryu/index.html